大乱闘スマッシュブラザーズX　～ヘルパー軍の逆襲～

ピノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大乱闘スマッシュブラザーズＸ　～ヘルパー軍の逆襲～

【Ｎコード】
Ｎ３２４１Ｚ

【作者名】
ピノ

【あらすじ】
ここはスマッシュブラザーズの世界。

今日もファイター達は大乱闘。

そしてそのためのアイテムを作るマスターハンドだったが、
作っていたアシストフィギュアの中身のキャラクターがファイターになりたいが為にフィギュアにならず逃げ出してしまう！！

この小説は一作目に比べると読みやすいです！！
沢山のコメントがあると嬉しいです＞－＜

因みに亜空の使者や破創の化身との関連性は無いです。
まったく別のお話です。

では是非読んでください！！お願いします＾＾

序章　～闘争心の逃走心～（前書き）

時間が許すならお付き合い下さると嬉しいです＾＾

序章　～闘争心の逃走心～

ここは創造神マスターハンドが支配する世界。
皆も良く知る『スマッシュブラザーズ』の世界だ。

選ばれたファイター達が乱闘を繰り広げ、己の強さを磨き、競い合う世界だ。

その世界で今、ある者達によって事件が起きようとしていた・・・。

マスターハンド
「ふう・・・、これで今日の乱闘はすべて終わったな。明日の乱闘に備えてアイテムの補充をして置くとするか・・・。」

大乱闘スマッシュブラザーズの世界ではアイテムの補充はマスターハンドの仕事だ。マスターハンドはただ自分の仕事をしただけだった筈だ・・・。

Mハンド
「今回はアシストフィギュアの消耗が激しいな。重点的に補充しよう。」

そしてMハンドはアシストフィギュアを沢山作ることにした。

アシストフィギュアの作り方は少し複雑だ。

?中に入るキャラクターを作り上げる
?作り上げたキャラクターにアイテムとしての意識を持たせる
?フィギュアに封印する
?中のキャラクターが弱らないように不思議な力をこめる
?中身を見えないように加工して出来上がり。

Mハンドはいつもの工程通りに、まずのアシストキャラクターを作り上げた。

作り上げたキャラクターは以下の通りだ。

・アンドルフ

・エキサイトバイク
・カット&アナ
・くるり&ラセンダー8
・サキ・アマミヤ
・サムライ・ゴロー
・ジェフ
・ジュゲム
・スタフィー
・チンクル
・デビル
・ドクターライト
・ナックルジョー
・ラブラドール・レトリーバー
・ハンマーブロス
・ヘリリン
・メトロイド
・リセットさん
・リトルマック
・リン
・ワルイージ
・レイMk？
・ロビン
・センシャ&ホヘイ
・バーバラ
・シャドウ
・サイボーグ忍者

Mハンド
「ふう、出来上がったな。」

いくら無限の力を持つＭハンドでも大量のキャラを作るのは少しは疲れるようだ。

Ｍハンド
「さて、次の工程へ移ろう。」

Ｍハンドは次の工程に移ろうとした。次の工程とはこのキャラ達にアイテムとしての意識を持たせることだ。だが・・・

ワルイージ
「おい！！俺らって何でアイテムなんだよ！！ワリオだってファイターとして出てるんだから俺らもファイターとして出してくれたって良いじゃねえかよ！！」

まだアイテムとしての意識が薄いワルイージがＭハンドに『俺もファイターが良い』と文句をつけた。だがこんなのいつもの事だ。大半のキャラは作り上げたときは文句を言うもの。Ｍハンドは無視してアイテムの意識を持たせようとした。だが・・・

ナックルジョー
「たしかにこのヒョロヒョロのおっさんの言う通りだぜ？俺達も一つ無制限に暴れたいぜ！」

サイボーグ忍者
「俺に生きる実感をくれ！」

ジェフ
「僕も時折ネスを羨ましく思うよ．．．。争いは好きじゃないけどこの世界に居るからにはファイターとして戦ってみたいな。」

リセットさん
「ワシはアイテムで登場したときも言ってることやで！！」

今回は一気に沢山のキャラを作り上げたため皆が一斉に文句を言い出したのだ。

Mハンド
「悪いが無理だ。世界のバランスを保つためだ。悪く思わないでくれ。」

Mハンドは適当になだめ、アイテムとしての意識を持たせようとした。だが、

ワルイージ
「嫌と言ったら嫌だぜ！！こうなったら自力でファイターにのし上がってやるぜ！！」

Mハンド
「無駄なことはやめて大人しくアイテムになれ。」

ワルイージたちのわがままにマスターハンドも少々イライラしていた。そして・・・！

リトルマック
「問答無用だ！！こうなったら皆で逃げるぞー！！」

フィギュア達
「オーーーーー！！」

なんとリトルマックの一言でファイターになる為に皆が逃げ出してしまった！！

Mハンド
「おい！待て！！おい！！！！」

マスターハンドは散り散りに逃げるキャラ達を追いかけたがすばしっこく中々つかまらない。

シャドウ
「カオスコントロール！！　　・・・よし！！彼の動きが遅くなったな。今のうちだ！！」

シャドウのカオスコントロールがMハンドに決まり、マスターハンドは追い回すことも出来なくなってしまった。　そしてフィギュア達はそのまま逃げ出してしまった・・・・・・・・・・。

Mハンド
「お～の～れ～！！　　は～や～く～つ～か～ま～え～な～く～て～わ～～～～～。」

序章　～闘争心の逃走心～（後書き）

どんどん連載していきたいです＾＾

コメントを下さるとありがたいです♪

引き続き応援よろしくお願いします＾＾

第1章　～時は戦国か？～（前書き）

ここから本格的に始まります＾＾

お楽しみに～！！

第1章　～時は戦国か？～

マリオ
「ふう、今日も中々良い戦いが出来たな～。」

リンク
「あのファイア掌抵は効いたな～。」

マルス
「でもリンクさんの剣技も見事ですよ。」

アイク
「やはりベテランは違うな。６４からのファイターは強い。」

サムス
「そんなことないわ。新しい方は進化して出て来るのですから。」

ワリオ
「そうだぜ！！新しい奴は強いんだぜ！！てか俺様が一番強いんだぜ！！」

ネス
「この人って謙遜ってことを知らないのかな…。と言うか今日ワリ

オさん爆薬箱食べて自爆してたっけ・・・。」

ここは大乱闘スマッシュブラザーズ?のファイター達の控え室。
たった今その日の戦いがすべて終わりファイター達が控え室に戻った所だった。

ここではその日の戦いについてお互いに和気藹々（わきあいあい）と話し合っていた。だが時は夜。もう皆は眠くなる頃だった。

ヨッシー
「ねえ、もう眠いよ～。明日も乱闘があるんだからもう寝ようよ～。」

メタナイト
「それもそうだな。では寝るとしよう。」

リュカ
「おやすみなさい。」

そして彼らは翌日に備え眠りに付いた。

明日にも大変な事件が起こるとも知らずに…

……そして夜が明けた。

ルイージ
「むにゃむにゃ・・・、あ、朝だ。皆さんおはようございます！」

オリマー
「ふ～。もう朝ですか。今日も頑張りましょう。」

オリマーの横にいたピクミンたちも眠そうに目を擦っている（特に紫）

デデデ
「なんぞい。まだ眠いぞい。」

スネーク
「おいおい、早起きは三文の徳だぞ？」

ワリオ
「本当か！？早起きしたら儲かるのか！？なら俺様は今日は２３時に寝て２２時に起きるぜ！！」

ファルコン
「おいおい・・・、酷すぎて言葉が出ないよ。」

朝も和気藹々としていた。

そしてそんなこんなで彼らは朝食を済ませて準備をしてマスターハンドが作り上げたスタジアムへと向かっていった。

フォックス
「あれ？マスターハンドがいないぞ？」

ナナ
「本当だ〜。」

ポポ
「どこに行ったんだろう？」

デデデ
「きっとまだ寝てるぞい。」

メタナイト
「陛下とマスターハンドは違います。」

ファイター達はいつもは居るマスターハンドがいないことに疑問を感じていた。しかし

ピーチ
「でも始めていいんじゃないですか？審判ロボも転送装置も動いてるわよ？」

ルカリオ
「まあ確かにスケジュールを守るのは悪いことではない。第一試合を始めても問題は無いだろう。」

スタジアムの機械の使い方も知っているファイター達は自分達で試

合を始めることにした。

ファルコ
「そんじゃ始めっか。第一試合は
ステージ　マリオサーキット
ストック　３
アイテム無し
参加ファイター
・ワリオ
・スネーク
・キャプテンファルコン
・デデデ
って所だな。」

Tリンク
「すなわち重量級戦ってことだね。」

ポケモントレーナー
「じゃあ参加するファイターは位置について。・・・・・・・・・・
着いたね。じゃあ大乱闘スタート！！」
ポケモントレーナーが乱闘開始のスイッチを押して乱闘が始まった。
参加しないファイターは観戦だ。

そして彼らはまだ事件が動き出すことを知る由も無い…

ワルイージ
「おい！みんな！！準備はいいか！？」

サムライ・ゴロー
「バッチリだ！！」

ロビン

「エナジーも満タンだよ！！」

ジェフ
「あ！出てきたよ！」

彼らは言わずと知れたヘルパー軍だ。

だが彼らはフィギュアに収まらずにマリオサーキットの脇道に隠れてファイターの登場を待っていた。

そしてファイター達が出てきた。

ワリオ
「いくぜぇ！」

スネーク
「ショウタイムだ。」

ファルコン
「Ｌｅｔ、ｓ　ｇｏ！！」

デデデ
「やってやるぞい！」

自動アナウンスシステム

「3，2，1！！　GO！！」

そして本格的に試合が始まった！！

ファルコン
「ファルコン・パンチ！！」（ドカ！！）

スネーク
「そこだ！！」（ドカン！！）

ワリオ
「ワリオっぺ！　・・・・・・・あれ？」（ぷぅ…）

デデデ
「スーパーデデデジャンプぞい！！」（ドシーン！！）

観戦者
「行けーー！！そこだーー！！」

乱闘も本格的に盛り上がってきた。そして遂に事件が動き出す…！！

リトルマック

「今だーー！！行くぞーー！！」

ヘルパー軍
「オォーーーー！！」

リトルマックの声を元に隠れていたヘルパー軍が動き出した！！

サムライ・ゴロー
「オラオラオラァーー！！ファルコンめ！！覚悟ぉ！！」

ワルイージ
「俺達にも闘わせてくれよ！！喰らえ！踏みつけキック！！」

リトルマック
「パンチなら負ける気がしないぜ！！とりゃあーー！！」

ヘルパー軍は好き勝手に攻撃を始めた。

ファルコン
「なにぃ！？ゴロー！！なぜおまえがここにいるんだ！？」

スネーク
「アイテムは無しでは無かったのか！？」

ファイター達は居るはずの無い存在の攻撃に驚いていた。

リセットさん
「くらぁーーーー！！ワシらをアイテム扱いしとったら許さんで！！そなリセットと同じくらいアカンことや！！ワシらも動き回って戦いたい言うことや！！第一にワシらはな……、」

サイボーグ忍者
「長い説教はいらん。簡単に言うと俺達もお前らの様にファイターとして戦いたいと言うことだ。」

チンクル
「だから下克上を起こして私達が戦士にのし上がろうと言うわけなんです～♪」

ラブラドール・レトリーバー
「ワン！ワン！」

デデデ
「そんな生意気なこと許さ・・・・・・」

ナックルジョー

「スピンキーック！！」

デデデ
「ぐほぁっ！！」

デデデはヘルパー軍の暴走を止めようとしたがヘルパー軍の勢いは凄まじく、逆にナックルジョーのキックをモロに喰らってしまった。

マリオ
「おい・・・、大変なことになってるぞ！！」

ファルコ
「そんなん見りゃ分かるだろ！！」

マルス
「とりあえず止めないと！」

サムス
「そうね！！みんないきましょう！」

観戦していた者達はこの状況に取り乱していたが、マルスの冷静な発言により急遽ファイター全員がマリオサーキットへ転送された。

シャドウ
「こんなものか？」

ファイター達が転送された時、デデデがシャドウの攻撃を受け続けていた。

ソニック
「Ｈｅｙ！！シャドウよせ！！話は聞こえてたがそんなの良くないぜ！！」

シャドウ
「フン。僕達はファイターになるためにやっているだけだ。」

ルカリオ
「クソ！！分からず屋め！！ところでマスターハンドはどこだ！？」

シャドウ
「あの大きな手なら僕のカオスコントロールのお陰で今頃彼の事務所の中を分速３？で動き回ってるだろうな。」

ルイージ

「ひどいよ．．．。ひどすぎるよ！！」

ワルイージ
「へ！知ったこっちゃねえぜ！！ここから俺らの下克上のが始まるんだよ！！」

こうして『ヘルパー軍の逆襲』事件が起きたのだった。彼らの運命やいかに……

第1章　～時は戦国か？～（後書き）

第1章終了！！

応援＆コメがあると嬉しいです！！

第2章　～超特大乱闘開幕！！～

リトルマック
「手加減はしないぜ！！」

ファルコン
「やるしかないみたいだな」

今39人のファイターと無数のアシスト軍がにらみ合っていた。

マリオ
「よし！！」

リトルマック
「みんな…、」

マリオ&リトルマック
「行くぞぉぉ！！」

全員

「おおぉぉぉぉーーーー！！！！！」

そして！！
今まで見たことの無い７０人を超える人数での超特大乱闘が始まった！！

アンドルフ
「おい！！この前に決めたフォーメーションに付いてくれ！！」

ヘルパー軍
「おぉー！！」

ヘルパー軍はアンドルフの言葉にしたがってステージ右半分を占拠した。

ルイージ
「フォ、フォーメーション！？」

ワルイージ
「げへへっ！！俺達はちゃ～んと作戦を考えてんだよ！！お前らはこの作戦にゃ手も足も出ねえぜ！！」

ワルイージはそう言うと自分のフォーメーション位置に付いて行っ

た・・・。

そのフォーメーションとは

ステージのほぼ中央（最前列）に、ヘリリンとロビンとドクターライト、（前衛部隊）

その少し後ろに、くるり＆ラセンダー８、エキサイトバイク、サキ
アマミヤ、サイボーグ忍者が、（第二部隊）

更に少し後ろに、サムライ・ゴロー、バーバラ、センシャ＆ホヘイ、
レイＭｋ３、ナックルジョーが、（中間部隊）

そしてもう少し後ろの上のコースに、リン、ワルイージ、ハンマー
ブロスが、（後方部隊・上）

下のコースに、ジェフ、スタフィー、リトルマックが、（後方部隊・下）

そして最後尾に、リセットさんとシャドウとラブラドールが、（最終部隊）

更に空中に、チンクル、カット&アナ、ジュゲム、デビル、メトロイドの五体が、（空軍）

そしてコースの奥底にアンドルフ、（司令官）と言ったフォーメーションだ。

マルス
「僕達もフォーメーションを立てたいな．．．。」

アイク
「俺達はその方も戦いやすいな．．．」

メタナイト
（本当の騎士はそういうものなのか・・・）

3人の剣士が小さく呟く。

ワリオ
「へっ！！何がローテーションだ！！所詮俺様の特攻には敵わないぜ！！」

そんなの関係無いと思う者も居る様だ・・・。

ワリオ
「オラオラオラァ！！行くぜえぇぇ！！！」

そしてワリオはバイクに乗り、敵のフォーメーションへ突っ込んでいった。

スネーク
「おいおい、戦場でそれはタブーだろ。」

フォックス
「と言うかローテーションじゃなくてフォーメーション・・・。」

だがワリオはそんなスネークたちの心配をよそに突っ込んでいく。

アンドルフ
「ぬぇ！？突っ込んできたか・・・、では前衛部隊よ、返り撃つのだ！！」

前衛部隊
「ラジャーー！！」

アンドルフがそう言うなり彼らは動き出した。

まずはヘリリンが縦盾（たて）になり、ワリオが後ろまで特攻するのを防いだ。そしてワリオバイクは倒れ、ワリオはバイクから落ちてしまった。

ワリオ
「おわっ！！危ねーじゃねえか！！邪魔だぞ！！通行妨害だ！！」

ワリオは怒り散らして、叫ぶように怒鳴った。

ロビン

「知るかー！！喰らえ！！これが僕のエナジーだ！！」

だがワリオの言葉など誰にも耳を傾けてもらえず、ワリオにロビンのエナジーが炸裂した。

そしてワリオはバイクと共に後ろへ押し流されてしまった。

ワリオ

「お、おい！！コラ！！こらぁ！！！！」

ワリオは押し流されて怒っている。

ワリオ

「おのれ～～！！フガ～～～～！！怒ったぞ～！！どりゃあーー！！」

そしてワリオの怒りが頂点に来たようだ。そしてワリオは今度はバイクに乗らずにやけくそに特攻した。

ガノンドロフ

「馬鹿か」

クッパ

「言うまでも無い事なのだ。」

ワリオ
「オラぁーーー！！ゆるさねえぜ！！」

アンドルフ
「まだ来る様だな。ドクターライト、お前の出番だ。」

ドクターライト
「お任せ下さい！」

ドクターライトはそう言うと特攻するワリオの足元から巨大な摩天楼を出現させた。

ドガアアアアアアア！！！！

ワリオ
「ごあぁぁ！！」

ワリオは強烈な摩天楼の一撃で空高く吹っ飛ばされ、ソニックの横

に落っこちた。

ドシーーーン！！

ソニック
「はあ～。だからみんな止めとけと言ったのにな。」

ピーチ
「それにしてもフォーメーションって凄いわね～。」

ロボット
「関心シテイル場合デハアリマセン。」

ワリオ
「ク、クッソ～～！！」

アンドルフ
「フォ、フォ、フォ！思い知ったか！！ではここから我々の攻撃を決行するぞ！！行け！！第二部隊よ！！」

ファイター達が唖然とする中アンドルフは高笑いをしていた。

第二部隊
「ははっ！！」

そして！ヘルパー軍の反撃が始まった！！

くるり
「どりゃーー！」

真っ先にくるりが突っ込んできた。そしてくるりはファイターの群れの中を縦横無尽に駆け巡る！！

ウルフ
「うぉ！危ねえじゃねえかこのクソガキが！！」

オリマー
「ひゃ～。私のピクミンが・・・、」

ファイター達はくるりの勢いに押されて避けるのが精一杯の者がほとんどだった。

メタナイト

「ふむ。中々厄介だが私達も食い下がる訳には行かないな。行くぞ！！ドリルラッシュ！！うりゃ！！」

メタナイトはそう言うなりドリルラッシュで返り討ちに行った。

ピット
「うわ～。ドリル対決だ。」

リンク
「ピット君呑気な事言ってないで応戦しないと！！」

リンクは弓を構えながら言う。

ピット
「あ、うん。やあ！！」

Tリンク
「僕も！！」

そして3人の弓使いはそれぞれくるりに向けて矢を放った。

三つの矢と1つのドリル（？）がくるりに向かって飛んでいく．．．

くるり
「きゃ〜〜！！アブな〜い！！」

ガキンッ！！

リンク
「決まったか！？」

リンクは『ガキンッ！！』という音に期待を膨らませていた。だが・・・

サイボーグ忍者
「そんな武器では俺には勝てんぞ！！」

リンクの目の前には刀を振り回すサイボーグ忍者がいた。サイボーグ忍者の前には折れた三本の矢と、ドリルラッシュの反動で少し後ろのめりなメタナイトがいた。

メタナイト
「何！？確実にラセンダーを破壊したと思ったのだがな．．．。」

サイボーグ忍者
「考えが甘いようだな！！所詮お前らは俺らには勝てぬ！もう一度行くぞ！！」

くるり
「2、3！！」

そしてサイボーグ忍者は刀を振り回し、くるりはドリルでもう一度特攻しようとした。がしかし、

ワリオ
「おいおいおい！！そんな特攻じゃあ俺様は倒せないぜ！！特攻ってのはこうやるもんだぜ！！」

ワリオは先ほどドクターライトの攻撃を受けたのにもかかわらず、元気にバイクに跨り、サイボーグ忍者に特攻して言った。

リュカ
「ワリオさんって勢いだけなら誰にも負けないな．．．。」

ファルコ
「つーかさっきあんだけ喰らっといて説得力がねーぜ。」

だがワリオはそんな心配など構わずに特攻していく．．．。

ワリオ
「おらぁーー！！今度は決めてやるぜぇぇ！！」

サイボーグ忍者
「まさにアホだな．．．、エキサイトバイク軍よ！返り撃ってやれ！」

ピコ？ピコ！？ピコ！　ブーン！！

エキサイトバイク軍団はぐんぐん加速し、ワリオに向けて特攻していった。中には跳ねる者などもいた。

因みにエキサイトバイクのライダー達はゲームウォッチ同様に善悪の区別は無いため、命令されたからやるだけと言った感じである。

ワリオ
「おわっ！こら！！バイクは一人一台までだぜ！？ズルすんじゃねえぞ！！」

ウルフ
「一人一台だろ．．．。」

そしてワリオバイクはエキサイトバイクの特攻でまた倒れてしまった。

ワリオ
「クッソーー！！ちびバイク共め！！踏んづけてやる！！」

そしてワリオは先ほど同様にバイクに乗らずにバイク軍団に突っ込んでいった。

アンドルフ
「しつこいデブもいるもんだな。ならばサキ　アマミヤとどめだ！」

サキ　アマミヤ
「ＯＫ！　Ｔａｋｅ　ｔｈｉｓ！！」

サキ　アマミヤはワリオにガンで攻撃をした。

ドドドドドドッ！！

ワリオ
「ぐわああぁぁぁ！！」

そしてワリオはまた吹っ飛ばされてしまった．．．

ルカリオ
「う～む。ワリオを見て分かるとおり並の力で戦うのは難しいな．．．。」

ワリオ
「この野郎～！！ルカリオ！！俺様を実験台にしやがったのかー！！」

ヨッシー
「自分からなったくせに…」

ファイター達がそれぞれぼやく。

だがファイター達はヘルパー軍の強さを痛感しているのは確かだ。

そしてこれからどうなるかを知るファイターやヘルパーはまだ居ないだろう・・・

次章へつづく・・・

第2章　～超特大乱闘開幕！！～（後書き）

終わった～＾＾

てか無理やり終わらせた＾＾

とりあえず次の章に期待して下さい（しすぎないでねw）

第3章　～ファイターの意地～

ワルイージ
「へへっ！！フォーメーションの恐ろしさが分かったか！？」

シーク
「いくら何でも酷いな．．．。」

サムス
「どうしましょう．．．。」

ファイター達は戦力的にも精神的にも徐々に追い込まれていった。

ワリオ
「くっそ～～！！俺様は不死身だぜ！！まだまだやってやらぁ！！」

しかし、まったく屈しない強い（？）心の持ち主もいた。

ワリオ
「俺様は成功するまで突っ込み続けるぜ！！行くぞーー！！」

そしてワリオはまたバイクに跨った。

ウルフ
「まあ、時間稼ぎには丁度いいぜ。」

クッパ
「でも無謀なのだ。」

ワリオ
「おいおいクッパ！！何ブツブツ言ってやがるんだ！！次こそは華麗にあいつらを轢き殺すんだから大人しく見てやがれ！！」

ネス
「華麗に轢き殺すって何か矛盾・・・。」

ワリオ
「行くぜぇぇ！！次は決めるぜぇ！二度あることは三度あるってやつだぁ！！」

そしてワリオはまた走り出した。

スネーク
「おいおい、三度あるなら次も失敗だろ。」

オリマー
「ことわざ使う意味・・・。」

だがワリオはスピードを上げて敵陣に突っ込んでいく・・・・・。

アンドルフ
「バカめ！」

アンドルフは口からポリゴン板を一枚吐き出しワリオにぶつけた。

バキィッ！！

ワリオ
「おわぁ！！」

ワリオはポリゴン板にぶつかりまた吹っ飛んでしまった。

そして遂にバイクも大破してしまった。

フォックス
「三度あったな．．．。」

ワリオ
「あああぁぁぁ！！俺様のバイクがぁぁ！！クッソーー！！あいつ！！」

ワリオはその場で地団太を踏んだ。

アンドルフ
「フォ、フォ、フォ！特攻は無駄だと言う事が分からぬのか？」

アンドルフは高らかに笑う。

Tリンク
「これじゃ勝てないよ．．．。」

マリオ
「どうしようか．．．。」

ファイター達は悩み続ける。理由は敵の固いフォーメーションを上

手く崩せない。それだけだった。

ルイージ
「ね、ねえ！提案があるんだけど・・・、」

だがルイージはそんな重い空気の中口を開いた！

ピーチ
「提案？」

ポケモントレーナー
「一体何をする気なんだい？」

ファイター達は首をかしげながらルイージに目を向ける。

ルイージ
「ま、まあ、提案って言うほどじゃないのかも知れないけど、特攻も悪くないと思うんだよね。流石に一人であれだけの敵に突っ込むのは無理があっても、みんなでかかれば行けるかも知れないと思わないかな？・・・・・・・・・・」

ルイージは少々自信なさ気に話した。

ネス
「うん、なるほどね・・・。」

シーク
「特攻か～。」

また少し空気が重くなった。だが！！

マリオ
「……ルイージ！！・・・ いいと思うぞ！！よく思いついたな！！」

ルイージ
「えっ！？」

ピーチ
「うん。私も賛成よ！！」

ルカリオ
「まあ、一概に悪いとも言えないだろうな。」

ファイター達のほとんどがルイージの意見に賛成だった。提案した本人はポカンとしているが・・・。

ルイージ
「みんな・・・、本当に？本当か！？うわぁー！僕の意見が賛成されるなんて何かすごく嬉しいや！なら早速攻め込もうよ！」

スネーク
「待て！！」

喜ぶルイージにスネークが低く怒鳴った。

ルイージ
「え？、え？なんで！？」

スネーク
「特攻なんてものはな、戦場では事前に作戦を練って行うものだ。作戦無しは厳しいだろう。かと言って今から作戦会議を開けば攻め込まれてしまう。よって、無謀だと思うが・・・。」

スネークの言うとおり敵はフォーメーションを整え直し、今にもファイター達に攻め込もうとしていた。

ルイージ
「そ、そんなぁ・・・。初めて僕の意見が採用されたのに・・・・・

・。」

ルイージは自分の意見を全否定されて肩を落とした。

ファルコ
「おいおい、でもよ。今から別の作戦を考えるほうが無謀じゃねえか？」

ピット
「うん。僕もそう思うな。考えるのなんて無理だよ。」

マリオ
「たしかにそうだな。臨機応変に行くのが最善じゃないか？」

だが、ファイターの大半はスネークの意見よりルイージの意見を反映していた。

ルイージ
「み、みんなぁ…。僕嬉しいよ！ありがとう！！じゃあそうと決まったら早速攻め込もうよ！！」

ファイター達
「おぉーーー！！」

スネーク
（臨機応変か・・・、俺も少し頭が固くなったな……。）

こうしてファイターの反撃が始まった！！

第3章　～ファイターの意地～（後書き）

終了～！

じゃ、コメとか応援あったらくださいな＾＾

第４章　～過激な撃破劇～（前書き）

冬休みが待ち遠しい・・・。

第４章　～過激な撃破劇～

ファルコン
「行くぞー！」

ファイター達
「おぉーーー！！」

ルイージの提案によりたった今ファイター達の特攻が始まるのだった。

そして、ファイター達全員はヘルパーのフォーメーションに向けて走り出した！！

アンドルフ
「なぬ？敵が全員で特攻してきたか・・・。ともかく前衛部隊よ！食い止めるのだ！！」

前衛部隊
「はい！！」

そう言うなり、ヘリリンが縦盾（たて）になり、ロビンはエナジーを放ち、ドクターライトはバリケードがてらウォール街を作り上げる。

ファルコン
「何だ！？さっきと同じか！？」

人一倍足の速いファルコンは最も早く特攻を仕掛けに行っていた。

ファルコン
「お前らの行動は読めてるぜ！！とぉ！！」

するとファルコンは強烈な飛び膝蹴りをヘリリンのコックピット部分にかました。

ガツウウゥゥン！！

ファルコンの膝蹴りは見事にクリーンヒットし、ヘリリンは彼方まで飛ばされた。

アンドルフ
「なんと！ヘリリンがやられてしまうとはな…、ロビン！、ライト！、意地でも食い止めてくれ！！」

アンドロフは焦りをほとんど見せずに的確に指示を出した。だが、そんな指示は無駄に過ぎなかった。

ロビン
「喰らえ！エナジームーヴ！！」

ロビンはエナジーを放ち、ファイターを後ろへ押し流そうとする。が、しかし！

フォックス
「こんなもの！リフレクター！！」

ロビンのエナジーは意図も簡単にフォックスのリフレクターに跳ね返されてしまい、逆にロビンが後ろへ押し流されてしまった。しか

もその後ろにはくるり&ラセンダーが待ち構えるように居たのだった。

ロビン
「う、うわっ！！くるり！危ないよ！！どけてーー！！」

くるり
「えっ？えっ！？きゃ～～～！！」

ドシーン！！

そのまま二人は激突してしまい、どちらも気絶してしまった。

フォックス
「この調子でどんどん行くぞ！！」

フォックスはそう叫ぶも目の前にはウォール街があり、クッパやガノンドロフは上手く超えられずに苦戦していた。

クッパ
「厄介なのだ。」

ガノンドロフ
「シークが羨ましいな・・・。」

二人はそれそれぼやく。

ドンキー
「ならばこうすればいいんだよ！！」

ドンキーはそう言ってウォール街の前にしゃがみこんだ。

クッパ
「何をする気なのだ？」

クッパはドンキーに問いかけるが、ドンキーは『見てろ』と言って真面目に答えなかった。

ドンキー
「行くぜ！！ハンドスクラップ！！」（バンバンバンバンバンバン！！！）

そういうとドンキーは地面を力強く叩き、ウォール街に大きな地震を起こした。

そして大きなビルはミシミシと音を立ててヒビが入る・・・。

ドクターライト
「わ！あわわわわ！！直下型の地震だ！マズい！！大型のビルは縦揺れには弱いんですよ！！」

ドクターライトは慌てふためく。しかしドンキーは手を緩めることなく地面を叩き続ける。

ドンキー
「ウホッ！！とどめだ！ジャイアントパーンチ！！」

ドッゴーーーン！！

そしてドンキーの強烈なパンチが一番前のビルにクリーンヒットさせた。すると、一番前のビルが崩れ、そのまま将棋倒しに後ろのビルも崩れて行く・・・。

ドクターライト
「わわわわ！！耐震構造を上げて置くべきだった！！　・・・・・・・・・・・ん？」

ドクターライトは一人慌てふためく。
そんな時、一人慌てふためいているドクターライトに大きな影が覆いかぶさった。そしてライトは何気なく顔を上げた。

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラァーーー！！

なんとドクターライトが突然大量の瓦礫に飲み込まれてしまった。
大きな影とは破壊されたビルの破片の影だったのだ。

そんな彼を見てファイター達はガッツポーズを決める。

ファルコン
「ＹＥＳ！とりあえず前衛の奴らを撃破出来たな。どんどん攻め込むぜ！！」

そしてファイター達はひたすら攻め込むのだった．．．。

第４章　～過激な撃破劇～（後書き）

ここも終了！！

ＳＴゲキ多い～ｏｒｚ

長く書くと面倒になるので、なるべく短くする事にしました。

引き続き応援お願いします＾＾

第5章　～更なる特攻～（前書き）

短い章をたくさん書くことにしました。

よろしくお願いします。

第5章　～更なる特攻～

アンドルフ
「第二部隊よ！返り撃て！！」

第二部隊
「ラジャー！」

アンドルフは力強く叫んだ。全員で決死の特攻を仕掛けるファイター達に前衛部隊を倒されて少しイラついている様だ。

そして第二部隊（サキ　アマミヤ、サイボーグ忍者、エキサイトバイク、そして現在戦闘不能のくるり＆ラセンダーで構成された部隊。）は特攻を仕掛けるファイター達を返り打つべく、攻撃を仕掛けた。

エキサイトバイク群
（ピコ！　ピコ！　ブーーン！！）

最初に動きを見せたのはエキサイトバイク達だ。
エキサイトバイク達は特攻してくるファイター達へ突っ込んでいった。

デデデ

「ぐあぁ！危ないぞい！！」

エキサイトバイク達は、はじめにデデデに向かって突っ込んでいった。
中々有効だった様だ。
が、しかし！！

ディディー
「デデデ～。大丈夫～？ここは僕に任せてよ！」

ディディーは突然バイク達が飛び交う所へ躍り出た。
一方のデデデは呼び捨てされた事に対してイラついていたが、ここは仕方ないと言わんばかりに安全な所へ避難した。

アンドルフ
「なぬ？わざわざ攻撃を喰らいに来たのか？バイク共よ！加減は要らぬ。とことん攻めるが良い！」

エキサイトバイク群
「ピコ！！ピコ！！」

エキサイトバイクの攻撃はアンドルフの指示によって更に強まった。

クッパ
「何をする気だ？」

ピーチ
「大丈夫かしら？」

ファイター達もディディーの奇行に首を捻る。だがディディーはそんな心配をよそに懐から何か取り出した。

ディディー
「これでも喰らえ！」

ディディーはその何かをバイク達に向かって放り投げた。
その何かとは…？

〔バナナの皮だ！！〕

クッパ
「バナナの皮だとぉ？」

ピーチ
「そんな・・・まさか……、」

だがそのまさかだった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ツルッ！！

嘘のようだが本当だ。

エキサイトバイクの一台がバナナの皮で滑って倒れてしまった。
それにつまずいたバイクが倒れ、またそのバイクにつまずくという大事故が発生した！

ディディー
「やたぁーー！！決まったぞ～！！」

ディディーはエキサイトバイク群を倒し、たいそう喜んでいた。

クッパ
「ふん！バナナの皮につまずくなんてダサいバイク達だ！！」

クッパは相手の存在を否定するように言った。

ピーチ
「でも、クッパこそマリオカートをやったら毎回バナナに引っかかるわよね？」

ロボット
「ソレハ私モ見タコトガアリマス。」

威張り散らすクッパに対してマリオカートに参戦した事のあるファイター達が口々にクッパの失敗談を喋り散らす。

クッパ
「あれは違うのだ！！　・・・違うと言ったら違うのだ！！！と、とにかく特攻を続けるのだ！お前らも油を売っていないで行くぞ！！」

クッパは少々焦りながら走り出したその時！

ツルッ！！

クッパ
「おわっ！！」

クッパはディディーがエキサイトバイクを倒すために投げたバナナの皮で滑ってしまった。

ピーチ
「ぷっ！カッコ悪いわね～♪」

ピーチはそんなクッパを見てくすくすと笑う。

第5章　～更なる特攻～（後書き）

まだ未完だけど一回投稿します

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3241z/

大乱闘スマッシュブラザーズX　～ヘルパー軍の逆襲～

2011年12月23日01時54分発行